

自然学習資料保存事業の経過報告（1）

事務局

当 NPO が受託を受けた静岡県による自然学習資料標本の収集 保存事業については、現在 1 年度目のまとめに入っています。作業のはじまった当初は、標本をどのような手順で受入れていけばよいか手探りででしたが、現在では植物、化石または貝、昆虫などそれぞれの手順で順調に整理 受入れ作業が進んでいます。

すでに伊藤二郎さんの植物標本は、すべてリストされ、杉野孝雄さんにより仮評価もされて、今年度中に第 1 号の寄贈標本となる予定です。

掛川の化石などの田邊 積さんの標本についても、現在リストが作成されていて、仮評価の作業に移っています。また、高橋真弓さんたちの昆虫標本については、高橋真弓さんを中心に数名の専門家の方々によって、受入れ作業が行われています。

標本の受入れ手順は、コレクションごと ID 番号がつけられ、標本は番号のついた箱に入れられて整理されます。昆虫の場合は、標本箱の中の整理を事前に行うために時間がかかります。箱の中の各標本には順番に番号が振られ、結果的に各標本には ID 番号－箱番号－個別番号という受入れ番号がつけられ、仮ラベルを付けられます。

各標本のデータは受入れ番号ごとに標本登録カードに記載され、データベースに入力されます。登録のためのデータベースのソフトは 12 月から作成され、入力フォームもできています。現在は、データベースサーバーを外に借りてインターネット経由でアクセスする形をとっています。また、受入れ標本はまとまっているため、エクセルで受入れリストを作成し、その中でデータを完成させたあと、サーバーに直接データを取り込む方法もとっています。

今年になり、三島の資料保存室には池谷仙之先生のところから文献や図書、ナウマンゾウ関係の標本などが搬入し、先生の協力で 4 階の資料整理室がとてもきれいな整備されました。また、三島用に mishima@spmnh.jp という新たなメールアドレスも設けられました。



3階の資料収蔵室の標本資料。搬入標本はコレクションごと ID 番号がつけられ、標本は番号のついた箱に入れられて整理され、その中の各標本には順番に ID 番号－箱番号－個別番号という受入れ番号が振られます。



4階の資料整理室で高橋さんたちが昆虫標本の整理をしているところです。昆虫標本は、すでに入っている標本箱が壊れていたり、標本が過密の場合、新しい標本箱に標本を移し整理配列しなおします。各昆虫標本に仮ラベルをつけられないので、箱の中の写真を撮ってその写真の上で各標本に番号をつけます。

2月9日には、2001年-2002年に設けられた県の自然学習資料検討委員会のメンバーと現在設けられている自然学習資料評価委員会のメンバーが三島の資料保存室を見学にこられました。

今年度の作業日程としては、3月中旬までですが、来年度は5月から再開されます。

自然学習資料保存室の視察と柿田川湧水自然観察会

及川 忠弘



3階の収蔵室で植物標本を保管する茶箱をチェック。



4階の整理室に展示してある標本を見学。

1月25日(日)、三島市に設置した自然学習資料保存室の視察と、清水町の柿田川湧水自然観察会が行われた。

当日は天候に恵まれ、快晴の真っ青な空を背景に、真っ白な雪に覆われた富士山が望めるほどであった。また、この季節にしては冷え込みもなく、野外観察にも気楽な陽気となった。

バックナンバーでもお知らせしている通り、資料保存室は、三島駅至近の静岡県教育委員会三島分室から部屋を借りて設置されている。もともと三島分室には放送大学、埋蔵文化財保存などの機能が入っていたが、それらの機関と肩を並べての設置といえる。この三島分室は三島市内でも最大の文教地区に建っており、周囲には静岡県立北高校、日本大学三島キャンパス、三島市立北中学校、三島市立北小学校などがある。将来、保存室の成果を公開するにも持つてここの環境といえる。

県による保存室の位置づけとしては、まだ博物館開設の準備室でもなければ、資料の収集・保管を行うバックヤードでもないわけだが、実質の活動内容はそれらの機能を担おうとしているところだ。

4階の資料整理室には、資料の一部が展示されており、池谷仙之先生のゴトランド島の化石、田邊 積さんの掛川の化石、伊藤二郎さんの植

物標本、高橋真弓さんの昆虫標本などが並んでいる。保存室担当の森 義之さんからは、資料の受付から必要情報の記録、同定、登録、標本整理番号の付帯など、一連の資料登録作業の流れをうかがった。また、柴 正博先生からは登録した標本をコンピュータでデータベース化し、記録する作業についてうかがった。

3階の資料収蔵室は、昆虫標本を収蔵する一室と、化石標本と植物標本とを収蔵する一室とに分かれている。どちらの部屋も日光を遮るため、窓には目隠しがしてある。しかしながら、もともとが普通の研修施設・事務室のような作りであるため、第一線の博物館のバックヤードのような室温・湿度の調整をする装置はなく、虫害対策も徹底的ではない。また、標本を整理するスチール棚も不足しているため、標本の入ったコンテナやバットがまだ床に並んでいる状態でもある。将来的には室内に機能的にスチール棚を設置し、資料の収納もスマート化する予定である。

会員の方からは、魚類の液浸標本の受付についての質問もあった。液浸標本は、保存液であるホルマリン溶液の揮発の問題もあり、室温調整、空調設備の整ったバックヤードでなければ大量の収蔵は難しいのが実態であり、これから先、剥製など動物標本を取り扱う際と同様に課

題となりそうである。

博物館は、ある一定のテーマのもと、資料を収集・保存し、研究・展示を行うことによって社会教育に役立てようとする機関である。資料の収集と保存は、博物館運営の大元となる事業であり、図書館が図書を収集・保管するのと同等に重要な任務である。今現在、保存室はその大元となる作業に地道に取り組んでいるところであり、これからも会員の皆さまのご協力を祈念したい。

保存室の視察を午前中に終え、午後からは清水町にある柿田川湧水での観察会となった。柿田川は、清水町の中心市街地に存在する泉と川である。湧水群は、周囲よりも 10 メートルほど落ち込んだ谷となっているが、その周囲には住宅地が迫り、国道 1 号線が間近を走り、大型ショッピングセンターも至近である。

この湧水地は、富士山とその周辺の雨や雪解け水が地中にしみこみ、それが地下水として湧き出したものである。数十カ所にも及ぶ湧き出し口からの湧水だけで、1.2 キロの河川を作り上げている。その先は狩野川との合流である。清水町をはじめ、沼津市、三島市、熱海市、函南町が水道水源として利用し、1 日の湧水量は 1 日に 100 万立方メートルとも計算されている。また、工業用水、農業用水にも利用されている。水質については環境類型で AA クラス、種別でも水道 1 級というほどだ。それゆえに透明度もきわめて高く、川岸から水底に繁茂する水草の様子や砂を巻き上げて噴出する水の様子が観察できるほどである。おまけに、自然散策路の真ん中に水たまりがあったかと思えば、それが小さな湧き出し口であり、そこからまた小さな流れが始まっている現場にも出くわした。

かつてはこの豊富できれいな水を使い、クレソン（オランダガラシ）の栽培が行われていたとのお話を杉野孝雄先生からうかがった。現在ではそのクレソンが生育範囲を広げているとのことである。また、ミシマバイカモやヒンジモの観察も行うことができた。

きれいな泉のおかげで魚類も育ち、その魚類をエサとする野鳥たちも集まってくる。展望台からの観察では、コサギが現れ、片足で水底をかき回し、飛び出してきた魚を長く鋭いくちばしで見事に捕らえる様子を見ることのできた。三宅 隆先生のお話ではヤマセミも現れることもあるとのことだったが、この日は残念ながら



柿田川湧水



杉野さんによる植物の説明

ら目撃することはできなかった。それでも、青い翼とオレンジの腹とを輝かせたカフセミも観察でき、川岸で赤い花を咲かせたヤブツバキの蜜を吸うメジロたちの姿も観察することができた。

柿田川はそのたぐいまれなほどの上質な水質と豊富な水量とにより、多くの生き物を育てている。冬の観察のため、魚影はやや薄く、昆虫類も見られなかったが、魚類では 30 種以上、トンボだけでも 30 種以上の生息が確認されているそうである。

柿田川は、静岡県内でも指折りの天然記念物的な存在であり、その湧水のしくみは地質学的にも大変興味深く、かつ、川に育つ動植物の種類はきわめて豊富である。もはや、柿田川ひとつだけで展示コーナーが作れそうなほどの資料を内包しているといっている。富士山を水源とするこの湧水群による河川は、まさに静岡を代表する自然といえるだろう。ぜひとも、何らかの形で資料を収集し、三島の保存室に収納し、行く行くは博物館展示へとつなげたいと希望する次第だ。

コスタリカを訪ねて

三宅 隆



雲霧林での野鳥観察

2003年暮れ、日本野鳥の会静岡支部の仲間と、中米コスタリカに行ってきました。

目的は、もちろんケツアールを始めとする多くの野鳥を見ることですが、エコツアーの分野で世界をリードするコスタリカの現状を知ることにも、興味がありました。

コスタリカはパナマ運河の上方に位置し、内戦などの危険地帯の多い中米には珍しく、非武装永世中立国として軍隊を保有しておらず、治安の安定している国です。産業は輸出がコーヒー位で、これといった産業のない地域です。しかし、豊かな自然を利用して観光を主体とした立国を目指しているのです。

四国と九州を合わせた程の小さな国ですが、850種類もの鳥類が生息し、70を超える自然保護区や国立公園が、国土の約13%を占めているのは驚きです。今回、首都サンホセから南の高地に60kmほど行ったサンヘラルドと、太平洋側のカララ保護区の2ヶ所を訪れました。

標高2500mにあるサンヘラルドは、熱帯雲霧林の中にあります。雲霧林は、霧に覆われる

ことが多く、晴れていたかと思うと急に霧がかかってきます。朝夕は寒く、熱帯だというのにセーターが必要な位です。高木からはサルオガセがたれています。

ここはケツアールが比較的容易に見られることで有名です。ケツアールは、和名カザリキヌバネドリ。大きさはハト位で、緑の金属光沢の羽、60cm位の長い尾を持った、不死鳥のモデルとも言える綺麗な鳥です。近隣国ガテマラの国鳥になっていますが、ガテマラでは、内戦などで生息地の破壊が続き、今では殆ど見られない幻の鳥となっています。

このサンヘラルドは民有地ですが、釣りや、ケツアールを見に来る観光客のためにロッジなどの宿泊施設も完備しています。きちんとした知識と経験を持った鳥ガイドも充実しており、多くの野鳥を正確に教えてくれます。民有地と言うのは、一度開発が進むとそれを阻止することは難しいのですが、保護することがお金になることが判れば、かえって保護が進むようで、ここでも、ケツアールを目玉にするため、

好物のアボガドの苗を植えるなど、積極的な保護活動を実施しているそうです。しかしケツァールだけ生き残れば良い訳ではなく、生息できる環境をいかに維持していくかが課題と思われます。

カララは、海岸性のマングローブ林から熱帯雨林までの多様な環境を持った保護区です。保護区内はトレールが完備し、プロのエコツアーガイドの案内により安全に自然が堪能できます。トレールでは、時としてハナグマやペッカーリーが横切り、樹上には多くの鳥たちが飛び交います。路上にはハキリアリが整列しながら移動しています。この森はまぎれもなく多様な生態系から成り立っていることを実感させてくれます。

タラコレス川の船による自然観察も楽しいものでした。ワニの餌付けなど俗っぽい物もありましたが、多くの水鳥が見られて全員大喜びでした。

今回、6日間の滞在で230種類もの鳥を見ることができました。日本国内では考えられない位の種類の多さに、この国の種の多様性を実感させられました。観光立国を目指すコスタリカですが、保護区や国立公園は別として、サンホセなどの市街地では、ゴミの散乱が目立ちます。



ミドリイグアナ

国の政策と、一般国民の意識のギャップはまだまだ大きいようで、この意識改革がこれからの課題のように思えました。

コスタリカは、日本からは地球の反対側に位置し、直行便もなく、遠く時間も経費もかかるため、まだまだ日本人の観光客は多くないようです。しかし今後、コスタリカの魅力的な自然を楽しむエコツアーは、もっともっと伸びそうに思えました。

自然研究会 自然保護団体の紹介

静岡昆虫同好会

静岡昆虫同好会は郷土の昆虫相の解明などを目的として1953年に、高校の生物部の部員、卒業生を中心として創立され、50年以上の歴史と実績を持つ、全国でも有数の昆虫同好会のひとつです。会員は260名ほどで、チョウをはじめ、ガ、トンボ、甲虫などを対象に活動をしています。静岡県は富士川の東西で昆虫相が大きく変わることもあり、以前は富士山や南アルプス地域などの分布調査が中心でしたが、近頃は分布を拡大している昆虫の調査、反対に衰亡の危機にある昆虫の生息状況や減少の原因、保護の方法などの調査研究も多くなりました。

会の活動としては、会員相互の交流を中心とした行事として、春の総会、夏の合宿、秋の談話会、冬の新年会などがあります。また、観察会、調査会も年に数回行われ、子供を対象にしたもの、昆虫の移動や分布拡大を調べるもの、環境保全を目的にしたものなどがあります。

会誌「駿河の昆虫」は調査報告を中心としたもので、年4回発行され、2003年末で204号となりました。会の連絡誌「ちゃつきりむし」も同時発行され、これも138号まで発行されています。

2003年には創立50周年を記念して、「駿河の昆虫」1~200号のチョウの分布に関する46000データを収録した「静岡県の蝶類分布目録」(13000円)が刊行されています。

静岡昆虫同好会：〒420-0815 静岡市上沓谷町14-9 諏訪哲夫方

年会費3000円。振替口座：00840-7-32635

コスタリカの の野鳥

三宅 隆



ケツァールのオス
撮影 打田 咲



オナガレンジャクモドキ



コスタリカノドシロフトオハチドリ

ギフチョウ 天竜市・引佐町境 枯山、2000年4月



静岡県の昆虫 (4)

春の女神

ギフチョウ

清 邦彦 (静岡昆虫同好会)



ギフチョウ成虫の飛ぶ枯山山頂付近 (2000年4月)

ギフチョウは3月下旬から4月中旬に見られる小型の
アゲハチョウです。春だけその美しい姿を見せるところ
から「春の女神」などと言われ、広くその名が知られて
います。幼虫は落葉樹林の下に生えるカンアオイという
植物だけを食べ、6月には落ち葉の下などでさなぎとな
り翌春羽化します。幼虫の食草であるカンアオイも、成
虫の蜜源となる花の多くも、林の中が春先だけ明るい
という落葉広葉樹林の環境に適応した「スプリング・エフ
エメラル」であり、ギフチョウもまたそれに合わせた生活環を持っているわけです。

静岡県のギフチョウの分布は、富士川周辺の「東方分布地域」と天竜川西側周辺の「西方分布地域」とに
分かれ、伊豆半島や静岡県中部には分布していません。これは、幼虫の食草であるカンアオイ類の中にも適
不適があって、東方分布地域にはランヨウアオイ、西方分布地域にはヒメカンアオイという良好な食草とな
る種類が分布しているからです。伊豆半島・箱根山にはランヨウアオイはあってもその量が少なかったり火
山活動の影響などで、静岡県中部では多く分布するのが食草として不適なズブカカンアオイであることなど
が、ギフチョウの分布しない理由と考えられています。

分布域は限られるものの、以前はその分布域の中では決して珍しい蝶ではありませんでした。富士川下流
の明星山のギフチョウは当時の登山ガイドブックにも紹介されていましたし、国鉄身延線の沼久保駅も手軽
にギフチョウを見ることのできる所として知られていました。トンボの生息地として有名になった磐田市の
桶ヶ谷沼の隣の鶴ヶ池にもイワタカンアオイを食草とするギフチョウが数多く生息していたそうです。

近年ギフチョウは太平洋側の地域で急激に減ってしまいました。先に書いたようにギフチョウは落葉広葉
樹林のチョウです。太平洋側のギフチョウの分布する暖温帯地域はやがては常緑性の照葉樹林となってしまう
所なのですが、これまでは人々が薪や炭の生産のため、積極的に落葉樹林を残してきました。薪や炭が不
要になってスギ・ヒノキが植林され、それが手入れされないために林内は暗くなって、カンアオイが育ちギ
フチョウが飛ぶ環境ではなくなってしまったのです。

現在ギフチョウの生息している芝川町、天竜市、引佐町では天然記念物に指定されています。天竜市・引
佐町境の「枯山」は生息環境がよく保全されていて、初心者でもギフチョウの飛ぶ姿を観察できます。

静岡県の植物（2）

ヨコグラノキ

長島 昭

昭和 40 年、女神山採石場近くの後藤謙太郎さん宅で県天然記念物の枯れた指定木とその説明文を見たのがヨコグラノキとの最初の出会であった。その後、相良高校の校舎の南側にヨコグラノキが植えられているのを見たことがある

平成 13 年に再び後藤さん宅をたずねた時、謙太郎さんが植えたというヨコグラノキがお宅の庭と女神山の馬頭観音の前に何本かあることを知った。それらの苗はどのようにして作られたのか分からなかった。この時、ヨコグラノキの実から苗を作り、その苗を女神山に植えれば、この木を絶滅から救えるかもしれないと思った。

その後、平成 14 年 5 月 26 日に荻間小学校で花の咲くヨコグラノキを見た。そして、7 月 27 日には後藤さん宅で果実の色付くのを見た。また、8 月 5 日には荻間小学校で落果が見られたので、女神山の山頂で果実を拾い集めた。福田氏と分けあってそれぞれの方法で発芽に挑戦することにした。

女神山のヨコグラノキ

昭和 29 年、藤江謙二さんは標高 111m の女神山（地元では帝釈山と呼んでいる）の山頂で珍木を発見し、県天然記念物調査員の杉本順一さんに鑑定を依頼したところ、ヨコグラノキであり、「天然記念物に指定したらよい」と言われた。その後、藤江さんは牧野富太郎博士から、四国の横倉山で発見したので『ヨコグラノキ』

と命名したことや、どうやら山頂を好んで生育していることなどを伺ったとのことである。

女神山石灰石の採掘は慶長年間から行われていたが、戦後になって盛んになり、採掘が進むにつれて山はしだいに削られ、山頂も狭くなり、水脈も変わってしまった。ヨコグラノキは山頂に 7 本生えており、それらは 30~50cm 位の直径であったという。しかし、次第に育ちが悪くなり、枯れるものも出はじめた。

昭和 38 年 12 月 27 日、ヨコグラノキが天然記念物に指定された時には 3 本（高さ 10~13m、目通り樹周 42~64cm）になってしまい、昭和 53 年 3 月の調査時には枯死寸前であったという。現在、山頂にある 3 本は昭和 58 年 4 月 10 日に地元のヨコグラ会の会員によって、故後藤謙太郎さんが育てた苗を植えたものである。

ヨコグラノキの栽培法

ナンテンやマンリョウは小鳥がそれらの果実を食べ、落とした糞から発芽して育つ。ヨコグラノキの果実も鳥に食べられ、胃袋で果肉をはがされ、堅い種皮は砂のうで傷つけられ、腸を通して排出される。そして、種子は地面に落ちて発芽するであろうと考え、次のような方法で長島と福田は栽培を試みた。

長島方式：1) 果実とほぼ同量の川砂をガラスびんにいれ、水を加えて竹棒で 100 回ほどこね回す。2) 種子を取り出して、水に入れ、沈んだ種子だけを取り出す。3) 種子は女神山の土を入れた鉢に蒔いた（平成 15 年 8 月 8 日）。



写真 1

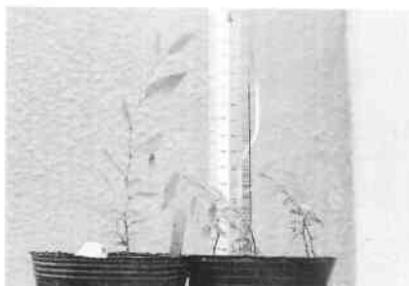


写真 2

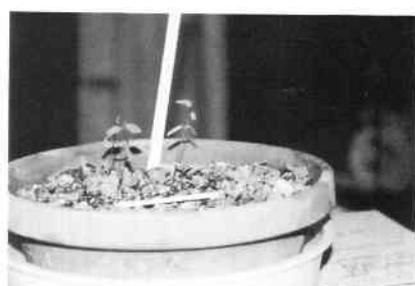


写真 3

その後、4) 野外で越冬させ、鉢には女神山の石灰岩片を置いた。5) 翌年3月21日に発芽し始めたので、油かすを少々入れて育てた(写真1:5月17日撮影)。6月26日に高さ10~14cm、7月31日に高さ約15~35cm、8月31日には高さ30~54cmに育った(写真2:6月26日撮影)。

福田方式: 1) 果実を10月まで部屋(常温)の中で保存し、10月から12月中旬までは冷蔵庫(約10℃)に入れた。2) 12月20日頃に「鹿沼土」(酸性)に蒔き、部屋の中で育て、30~35℃の温水を毎日かけた。3) 翌年1月15日に3個、23日に1個、2月2日に1個が発芽した(写真3:2月10日撮影)。4) 日中は室内で太陽光を当てて育て、2月18日には高さ3~4cm、茎の太さ0.3~0.5mmとなった。5) 5月7日には6cmになったので西日の当たらない野外に出した。6) 10月初めには高さ50cmにまで成育した。

今後の計画として

落葉樹の挿し木の時期は落葉後から2月までであるので、落葉直後に採穂して、地中に埋めて保存し、2~3月ごろ女神山の土や鹿沼土に挿す。また、2月ごろ採穂して、同じく女神山の土や鹿沼土に挿す等、挿し木による苗作りを考えている。

荻間小学校のヨコグラノキの説明板

「石灰岩地に育つ木で、葉が交互に2枚ずつ付くのが特徴。植物学者の牧野富太郎博士が郷里高知県の横倉山で発見し、命名したもの。少数の珍木で、県内では伊豆天城山だけ。全国でも神奈川県丹沢山と茨城県などで確認されているにすぎない。昭和28年ごろ、女神の帝釈山上で藤江謙二校長が見出し、同38年12月28日に県文化財に指定される。この荻間小学校のヨコグラノキは昭和42年ごろPTAによって移植され、3本中1本は花も咲く実も成る(帝釈山の指定木は枯死)」とある。この説明文には2・3の間違いがあるので、建てかえる時には次のように訂正するとよい。さらに説明板を立てた年月日や設置者も記述した方がよいと思われる。

「藤江謙二校長」は「当時相良小学校教員藤井謙二氏」に、「昭和42年ごろPTAによって移植され、」は「昭和47年、当時の教頭、渡辺鋭一郎先生の発案により、女神の後藤謙太郎氏より苗をいただき、PTAの協力を得て帝釈山から移植した」に、また「3本中1本は花も咲く実も成る」は「平成15年は3本とも花をつけ実も成った」にする。



写真4: 荻間小学校に植わっているヨコグラノキ 平成15年10月12日

静岡県の水生生物（3）

ヤマトイワナ

板井隆彦（静岡淡水魚研究会）



大井川産ヤマトイワナ 撮影：望月雅史氏

ヤマトイワナは高山の源流付近の冷水を生息域とするアメマス類のうちの1地方群（亜種）で、本州の相模川以西から紀伊半島にかけて分布する日本特産の魚です。

山岳の溪流という不安定な食物条件の下で生活するため、水生昆虫や陸生昆虫からヘビなどの小動物さえ捕食する広食性を示しますが、釣り味や食味が好まれ、釣人がこの魚を狙い山の奥深くまで遡行します。

静岡県では、大河川である天竜川や大井川水系の中流部より上流の本支流の源流部で見られます。大河川の一つ富士川の県内側には生息地はありません。狩野川、興津川、安倍川など中小河川でもあちこちで見つかるようになりましたが、いずれも、近年に移植されたもので、異亜種に属するニッコウイワナです。水産資源の増殖の目的で、漁協や釣り人によりヤマトイ

ワナの生息域にも放流されてきました。

昨年まで実施してきた静岡県版レッドデータブックのための調査で、天竜川や大井川では、ニッコウイワナはすでに大部分の河川の奥まで入り込んでいることがわかり、ヤマトイワナに絶滅の危険が迫っている（絶滅危惧Ⅰ類B）ことがわかりました。

サケの回遊ルートがない静岡県の川に購入したサケの稚魚を放して、エコロジカルな活動をしたと報道するテレビ局もまだあるようですが、良識ある方々は、オオクチバスのみならずこういった外来魚を放つ行為が、多くの在来魚を絶滅の危機に追いやっていると気づいてほしいものです。

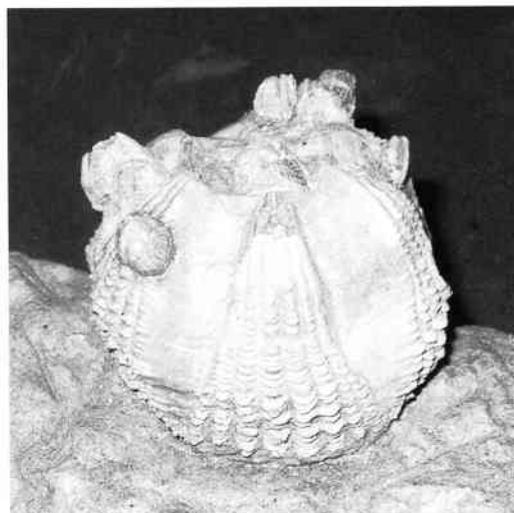
コレクション紹介 (1)

田邊 積氏の掛川の化石

柴 正博



モミジツキヒガイなどの化石群集



オニフジツボの化石

田邊 積氏は袋井市に在住で、本 NPO の会員でもあります。田邊さんは、約 20 年間にわたり掛川層群の化石を採集し、多くの貴重な標本を所有されています。今回、県の標本収集保管事業に協力いただき、約 5,000 点の化石標本の受入れ作業が現在進んでいます。

掛川市の特に市街北側の丘陵は、今から約 200 万年ほど前に浅海や沖合いの海底で堆積した砂層や泥層からできていて、そこにはしばしば貝化石がたくさん含まれます。この地層は掛川層群と呼ばれ、古くから多くの地質学者が掛川層群の地層や化石研究してきました。そして、世界的な地層の対比にも日本の代表として掛川層群やその化石の研究が参照されています。

田邊さんが採集を続けてこられたこの 20 年間には、掛川市のいたるところで造成工事や道路工事が行われ、丘陵は造成地として消滅し、道路の壁面はコンクリートや植生で覆われてしまいました。そのため、現在では掛川市で化石採集をする場所がほとんどない状態です。

田邊さんは、この 20 年間、休みの日には必ず掛川に出かけ、いくつかの露頭を回り化石採集を続けてこられました。そして、化石を採集して家に帰ると、化石のクリーニングやその整理にほとんどの余暇を費やされました。

田邊さんの 20 年間の努力は、この 20 年間に消失した掛川市に存在していた多くの化石の記録をとどめることになりました。その精力的な化石採集によって、どんな地質学者や古生物学者も収集していない貴重で膨大なコレクションが保存されることになりました。田邊さんの標本は、いわゆる掛川動物群で代表される温暖浅海性の貝化石だけではなく、いろいろな場所や堆積環境の地層から採集されているので、その種類がとても多いのが特徴です。

田邊さん自身語っています。「最初は単なる趣味のひとつとして始めたことでしたが、続けている間に多くの友人ができ、励まされ、また多くの化石の先生とも知り合いになり、化石についていろいろと勉強をすることができました。化石採集を続けていて、本当によかったと思います。」と。そして、田邊さんは、採集された膨大な標本を、研究資料としてはもちろんですが、子供たちの教育資料としてもっと活用しようとしてご自身でも活動を行っています。

そのひとつとして、今年の夏(7月22日~31日)に、12,600点の化石を展示する「静岡県の化石展」を袋井市役所市民ギャラリーで開催されます。これには本 NPO も協賛しますので、ぜひご覧ください。